博物館ボランティア養成セミナー（9）

考古資料から分かること

人文学部　橋　本　博　文

1．考古資料の概念

1）遺跡・遺構・遺物

前回は「古人骨から分かること」ということで、今日は人類史の部屋のもう一つの要素「考古資料から分かること」という考古学の方の話をさせていただきたいと思います。

先ず「考古資料とは」という概説的な話をします。考古資料とは基本的にモノを扱うということになります。考古資料の概念としては遺跡・遺構・遺物という三つの概念があって、皆さんよくご存知なのは、遺跡と遺物でしょうか。でも、遺構という言葉は遺跡、遺物に比べるとあまり馴染みがないのかも知れません。遺構は遺跡と遺物の間に位置しているということで頭の中に整理していただけると分かりやすいと思います。具体的にいうと、遺跡とは過去の先人が行動した一定の広がりを持つ空間を呼んでいます。

2）人工遺物と自然遺物

それに対して遺物とは、普通、手にとることが出来る動産、物であって、皆さんが馴染みやすいのは、人が過去に作ったもので、人工遺物という概念に当たるものです。具体的にいうと例えば土器とか石器とか青銅器とか骨角器とか、そういう道具類が頭に浮かんでくるかと思います。ところが考古学の立場からしますと、それは遺物の範囲の中でも一分野にしか過ぎません。もう一つ肝心なものとして自然遺物という概念があります。これは馴染みのないものかも知れません。例えば貝塚の貝殻は人が作ったものではなくて、自然に貝が生息していてそれを人が採ってきて食べて殻を捨てたというものです。ただし、海辺に打ち上げられた貝殻と貝塚に落ちている貝殻とでは違いがあるのです。この貝塚に持ち込まれていた貝殻には人が介在している。自然の営為だけではなくて人が介在している。人がそこの貝を拾ってきた。それは食料にするためだけではなくて装身具に使うために特殊なきれいな貝殻を拾ってきた可能性もありますが、おおかたは食べるために拾ってきて、食べた殻を捨てたということになるわけです。

そうするとその貝殻を調べることによって、その貝殻から当時の人たちがどういう食生活をしていたのかとか、当時の気候とか貝採取の季節性がどうであったとか、そういうような生活や環境が分かるということになるわけです。だから人が介在しているか否かによってそこに自然遺物という概念が生まれてくるということになります。たまたま出来た自然の貝層があって、それが化石になっているとかいうのは、全然人とは関わりあいがな

いということになるのです。

だから、貝塚の貝は「自然遺物」で、遺物であるという概念になります。他に自然遺物としては、遺跡の土壌、これも人が直接は関わってはいないのですが、その土を調べることによって当時の古環境、どういう植物が繁茂していたかとか、どういう昆虫がいたとか、いろんなことが分かってくるわけで、それも自然遺物になりうるわけです。貝塚から出てくる動物の骨なども貝と同じような扱いになるわけです。人工遺物ばかりでなく、自然遺物も大事にした研究がなされなければなりません。人工遺物と自然遺物とを併せることにより過去の様子が豊かに復元できるということになるわけです。

日本の考古学の父と呼んでもいい人物として、アメリカ人のエドワード・シルベスター・モース（E. S. Morse）という人がいます。モースは明治10年、東京都の現在の大田区と品川区にまたがって存在する大森貝塚を最初に発見し、その後すぐその遺跡を訪ねて発掘して学問的な調査をするわけです。元々モースという人は貝類の学者なのです。自然科学の学者ですが、その方が遺跡の発掘をする。その発掘報告書“Shell Mounds of Omori”、日本語訳では『大森貝墟古物編』という名前の本が東京帝国大学から出されるわけです。その中でモースはどういう報告書を作ったかというと、縄文土器など人工遺物の記載も優れているのですが、それにプラスして自分の専門である動物類、例えば貝などの記載もしっかりした記録になっていまして、そういう人工遺物と自然遺物とを合わせた報告書が出来ているのです。そういう形でごく当初の記念碑的な日本考古学の足跡を残す報告書が最初の段階から、自然遺物を大事にしたということは、モースが動物学者だったということによると思うのです。それがしばらくの間人工遺物を中心とする研究になっていってしまうのです。その自然遺物を忘れたような研究になっているのです。貝塚を発掘すると、出てくる縄文土器とか石器などに目を奪われて自然遺物を捨ててくるというか、貝などは持ってこないというような、人工遺物だけの研究になっているのです。しかし、その後そういうものを見直す研究が行われてきているというのが現在でありまして、最近は動物考古学会というのが出来ています。自然遺物、動物の骨などを重視した研究が行われていまして、『動物考古学』という雑誌も発刊されております。

3）遺構概念とその変化

次に一寸戻って、遺構という概念に関してお話します。遺構とは具体的にいうと、例えば竪穴住居の跡、トイレの跡、穴倉、落とし穴とか日常過去の人たちが地面に工作した跡などです。これは不動産で地面にくっついているものです。だからその地面から剥がし取ったり、手にとることが普通は出来ないものです。ところが、最近科学技術が進んできますと、例えば液体窒素などで、遺構の地面などを固め移築したりします。具体例で言いますと、東北地方の青森県の弘前の南に田舎館村という村がありますが、そこでバイパスを作ろうと道路建設をしたときに、現在の水田の下から弥生時代の水田が見つかったのです。それは弥生時代の水田が東北地方の北部から見つかったということで非常にセンセイ

ショナルに報じられました。ほんとうに弥生時代の水田かということが疑われたくらいなのですけれども、どうも弥生時代の水田面だということで、東北地方にもかなり古い段階で弥生時代の水田が、水田稲作農耕が伝わっているということがそれで実証できたのです。その垂柳遺跡の畦畔ですが、それが非常にミニな水田でありまして、現在私たちが見る大きな区画の水田とは異なっています。その弥生時代の水田は畦の一辺が1.5メーターとか2メーターとか非常に小さな区画が連なっているというものです。これを道路にしてしまうということで、ちょっと計画変更できないかと検討されたのですが、結局できないということで、破壊される運命になったのです。しかし、このまま壊すだけではもったいない、どうにかできないかということで、そこを液体窒素で固めまして、それを切り取って、ダンプに積み込んで田舎館村の歴史民俗資料館に持っていき、その中にドンと置いて展示するということをやっているわけです。これは遺構ですが、それを切り取って移動して、移築展示するということをやっております。遺構は、先程地面から剥がせないとか、切り取れないとか、動かせない不動産だとか申しましたが、そういうようなこともやられています。他に九州の熊本の方だったと思うのですが、塚原古墳群というところでも、古墳に道路がぶつかってしまって、その古墳を調査後移築するということで、元々あった位置から脇に移動して残したというようなこともやっております。こういうのを移築保存、造形保存という言い方をしていますが、最近はそういうようなことにもなってきています。

一方、剥離標本というのがあって、これから上で見ますが、それは遺跡の地層を剥ぎ取ってくるというものです。地層にじかに接着剤を塗ってそれにガーゼを当てて、固まった所でそれを剥がすわけです。剥がしたものを処理をしてパネルにするという形で、これも一つの本物の地層を取ってくるということになるわけで、造形保存の一種になるかも知れませんが、剥離標本と呼ばれ、博物館でそれを展示するようになっております。

4）考古資料と研究法

以上のようなことが遺構や遺物の概念ということになります。考古学の研究では遺物の研究をする人もいます。刀の研究とか、土器の研究とかそういうのを専門にする人もいます。遺構の研究、例えば竪穴住居の構造についての研究をする人、トイレの研究などをしている人もいます。また、遺跡レベルの研究をしている人、吉野ヶ里遺跡の全体像を把握するとか、そういう研究の仕方もあります。基本的にはこれらを有機的に結びつけてやっていかなければいけないわけです。たとえば地域の歴史を考えていく上で、その地域の一定のエリアの歴史を考古学から再現していくという研究をするために、地域には遺跡がいくつもあるわけで、複数の遺跡を束ねて研究する、比較してやっているわけです。そのためにはこの遺跡がどういう構造で出来上がっているのかということを明らかにしなくてはなりません。そうすると遺跡というのは、遺構と遺物から成り立っていたわけです。遺構の中に遺物が入っている。ないしは遺構の外から出てくる遺物も勿論あります。遺構に伴わない、包含層出土という扱いの遺物があるのですが、遺構から遊離してしまった遺物も

あります。その遺構に、例えば竪穴住居の中から当時使われた状態で出てくる土器などもあるわけです。そういうことで遺構と遺物がどういう有機的な関係にあったのかというような研究もしなければならないということになります。そして同時期の、あるいは別の時期の遺構と遺構がどういう関係にあったのか、例えばトイレと竪穴住居とはどういう関係にあるのか、住居と住居の関係がどうだったのか、そういうものを総て総合的に結び付けられて、それではじめて遺跡が把握できてくるということになります。そしてその遺跡が把握できたら違う隣の遺跡との関係をつかんで、地域の歴史像が浮かび上がるというような関係になってくるというのが、考古学の研究方法なのです。だからそういう基礎的な研究をしていかなければいけないということであります。

5）隣接諸学の対象と考古資料

考古学以外に隣接した学問でどういうものが対象になっているかというのは、ここに書いてある通りです。文献史学の対象は文字資料です。文献とか古文書とか古記録があります。民俗学では民俗資料で民具とか伝承、伝統芸能などが対象になっています。民族学、これは「やから」の方ですが、こちらは民族誌だとか言語だとかいろんなものが対象になります。人類学では先回見てきたような古人骨や現代人の人骨なんかも対象になります。結構それぞれ性格の異なる資料がそれぞれの学問の対象になっているということがお分かりいただけるかと思います。そういう中で例えば考古資料にもなるし違う学問の対象にもなるというものでは、出土文字資料というのがあります。発掘等によって土中から出てくる文字資料で、例えば墨書土器、土器に墨書きした文字があるものですが、これは文献史学、例えば新潟大学でいえば小林昌二先生などが担当します。一方、土器としては私たちが考古学の立場から研究をするということにもなります。木簡もやっぱり地中から出てきた文字資料ですから、文献史学の研究者も考古学者も併せて研究をやっていきます。その他漆の容器の蓋紙に利用した反古紙に文字が記されていた漆紙文書というのもあります。そういうものを隣接した領域の研究者が共同で研究して、より深めていくということになります。

金石文、これもやはり考古学との関係が深いもので遺跡から出てまいります。例えば埼玉の埼玉（さきたま）稲荷山古墳から出てきた金文字の象嵌された鉄剣、象嵌銘鉄剣などがあります。在銘鏡という、例えば銘文のある鏡、年代の書かれた鏡とかそういうものも考古学の対象になりますし、一方で金文と石文とを合わせた、金属に書かれた文字資料、石に書かれた文字資料を合わせた学問上の位置づけとして、金石文という学問が存在します。古碑とはいしぶみですが、これもそういう古い碑などは考古学と結び付けられて研究が行われるということになります。最後にこの前お話した古人骨ですが、これは考古学の立場からも使えるし、一方で人類学の研究の対象ともなります。

以上考古資料というものから何がわかるかということで前置きが長くなりましたけれども、そういう視点で私たちが考古資料を扱っているということであります。これから上に

上がりまして実際の展示をご覧いただきまして、ボランティアとしてどういったところを見所として解説していただき、一般の人たちにも分かりやすい面白い話になっていくのか、その辺をかいつまんで話させていただきたいと思います。上に移動をお願いいたします。

2．あさひまち展示館人類史室の展示から

1）大平遺跡の旧石器

この展示室の中で一番古い考古資料がここにある石器です。石器だけが並んでいるということは土器がないということで、縄文時代より以前のもっと古いいわゆる旧石器時代の資料です。これの出てきた場所は大平（おおだいら）遺跡といって水原の遺跡です。その場所は安田と笹神の間くらいの所ですが、五頭山地の西側の麓にあって、山が平野に移行していく途中の傾斜地にあります。ここは元々河川が形成した扇状地という地形なのですが、扇状の縁のところに位置した扇端部で、扇頂部という扇の要の位置が水位が高くてそこから河川が伏流して下にもぐって行きまして、水位が下がるわけですが、その裾の方で、水が又湧き出すわけです。そういうスプリングラインと言いますが、泉が湧き出す所が扇端部に相当します。そういう所は人が住みやすい所なのですが、そこにこの遺跡が作られて残されたということです。

そこは現在自衛隊の演習地の中なので普通には入ることは出来ないわけで、昔新潟大学の考古学研究室で、自衛隊に断ってこの中を調査させていただいた経緯があります。以前からそこに行くと石器が出ると言われていまして、石器だけではなくて、薬きょうも拾えるという場所であります。実際に五十嵐キャンパスの中の総合教育研究棟の三階にある人文学部資料展示室には新しい遺物なども一緒に展示してあって、その残りの石器がここにあります。

この石器の手前にあるのが細石刃といって、非常に小さくて長さが2センチ前後、幅が5ミリくらいの小さい石器です。この石器は、これ単体で使うのではなくて、角とか骨とか木などに溝を切って彫って、そこにこれを複数はめ込んでそれを組み合わせて使うというものです。槍のように使ったり、ナイフのように使ったりとか、そういう組み合わせ式の石器だといわれています。刃こぼれしたり、切れが悪くなるとこれを交換して、新しい切れ味のいいものと差し替えるという形で、現在私たちがカッターナイフを使っているのと同じように非常に優れものの石器です。こういうものを束にして持って歩けば、大きい原石とかを持って重い思いをしなくても、身軽にしていられるという便利なものです。ですから移動生活に適しているといわれています。北方系の石器で、マイクロブレードと呼んでいます。

その上にあるのが掻器。エンドスクレーパーと書いてありますが、手前側の方がU字型に弧を描いていまして、そこに刃が付いていて、皮の裏側の脂肪を掻き取ったりするのに使われる石器です。その右側にあるのはサイドスクレーパーと書いてありますが、これは細長い石器で横に刃が付いていて、肉などを切ったりするときに使ったりした石器だろう

といわれています。一番左側はナイフの形をした石器で刃器ないしは尖頭器といわれる先の尖った石器で、これは槍の先に付けたりした石器ではないかといわれています。

こういう石器の一群は後期旧石器時代という旧石器時代でも新しい段階の石器と考えられるものです。この石材は色を見て分かるように非常によく似ていて殆どが同じような石材、珪質頁岩という一寸つやがある頁岩を使用しています。これはかなり質のいい珪質頁岩を使っています。この質のいい珪質頁岩は山形の方に産地があるのではないかといわれていて、遠隔地から搬入された可能性もあります。人が移動したものか、物々交換したものかどうかわかりませんが、そういう質のいい珪質頁岩です。最近、阿賀北地域の新潟県内にも珪質頁岩があるということが分かってきました。あまり質がよくないものですが、触って見られるように籠の中に展示してありますので、手に取って御覧下さい。

2）縄文土器の変遷

次に縄文土器の変遷のコーナーです。この展示のハイケースは、4段になっていまして、ここの土器は下から上まで時期ごとに分けてあります。縄文時代は最近は6期区分といって草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と分けています。そのうちのこのケースでは基本的には地層を思い浮かべていただきたいのですが、地層の通りに下から古い順に並べてあります。地質学で地層累重の法則といいますが、下にあるのがより古いということになります。新潟大学で持っている一番古い縄文土器というのは早期の土器で、残念ながら草創期の土器はないのです。皆さんもし草創期の土器を拾った方がいらっしゃったら、御寄贈いただきたいと思います。棚の下段から早期、前期、中期のものでその後の後期のものをここには出してないのですが、後期の土器はあることはあります。一番上は晩期になっております。早期の土器で、ここにあるのは有名な上川村の室谷洞窟の資料です。全国的に有名な遺跡ですが、一昨年ですか、室谷洞窟の石器や土器は国の重要文化財指定になりました。実はここにあるものは重要文化財指定を逃れてしまった、落ちてしまった資料なのです。室谷洞窟は長岡の中村孝三郎先生が中心になって調査されたため、そこで出た殆どの資料は長岡市の科学博物館の方に行っております。その調査当時、草創期の層ではなくて上の早期の層から人骨が出ています。その人骨が新潟大学にもたらされ、1980年に亡くなられた小片保先生が鑑定されているわけです。その時に受け入れた人骨と一緒に石器と土器が紛れ込んでいたのです。それをしばらく知らなかったのです。ところが私たちが調査したところ、石器と土器が入っているということが分かって、それを調査して今このように並べています。左側が室谷の土器で右側が石器です。土器の方ですが、残念ながら草創期が入っていなくて、がっかりしたのですが、それでも早期の土器でも貴重な土器が入っています。

3）海の貝の文様をもつ縄文土器

基本的には撚り糸文という縄目の文様の、縄文の土器では古い技法の土器が入ったりし

ていますが、面白いのはこの中の真ん中辺りにある、手前から二番目の白っぽい土器があるのですが、その土器は縄目の紋様を持たない縄文土器です。それはどういう文様かというと、貝殻を利用して文様をつけた土器です。その貝殻は特殊な貝殻でありまして、ここにその種類の貝があります。これは当時の貝ではなくて、現代の貝ですが、アナダラ属という貝です。ここに二つ並んでいる貝は似ていますが、同じアナダラ属の別の種類の貝で、奥にある貝はアカガイで、すしネタになっていて、結構高級な貝なのです。展示のためにこの貝を捜し求めたのですが、なかなか入手できなくて最終的には寺泊まで買いに行きました。手前のものはサルボウという貝で、これは佐渡の真野湾の産で、新潟大学の理学部の臨海実験場が相川にあって、そこから取り寄せた標本です。二つは一見するとよく似ているのですが、表面の肋（ろく）の数が違います。アカガイが42本前後、サルボウが32本前後です。両方とも共通性として二枚貝で、肋が非常に発達しています。これはアナダラ属の特徴なのですが、これ以外にハイガイというものもあります。ハイガイはもっと肋の数が少なくて17～18本です。

この種の貝の縁の部分を利用してそれを押し当てて文様を付けているのです。貝の台の粘土の所に文様を付けてありますので後でご覧下さい。それと土器のものと比べてみて下さい。波状の文様が付いています。この貝は淡水の貝ではなくて、海水の貝です。その海の貝を使って文様をつけた土器が山の中の洞窟遺跡から出てきたということはどういうことなのかということなのです。皆さんの推理はいかがでしょうか。交易という考え方があります。それは海側の集団と山側の集団が交易を行って、物々交換などをしてそういう土器を入手したということが一つ考えられます。土器を入手したという考え方と、海の貝を入手して、それを道具として使ったという考え方も出来ます。食べたのかも知れません。縄文海進は始まりつつあった段階です。本格的な縄文海進というのは縄文の前期なのです。その時期に一番海が入ったということです。地球が温暖化して大陸の氷河が溶けて海水面が数メートルアップして、海がずうっと陸地まで入ってきたというのが縄文海進ですけれども、その段階よりはまだ前の段階です。現在よりは少し内陸部に入っていたかも知れません。一つの考え方としてはそういう環境が違って海岸線が現在よりももっと奥に入っていた可能性があります。新潟平野は低いから一寸海面上昇すればかなり海岸線が潟の辺りまでずうっと入ってきて現在より海岸は山に近かったということも考えられます。あとは海岸部の人たちが山の方に移動したという考え方も出来るかと思うのです。いろんなことが考えられますが、どれが正しいかはよく分かりません。そういうことをいろいろと考えてみることも面白いと思います。そういうことで海の貝を使って模様をつけたこの土器というのは非常に面白い土器であるというところに注目していただければと思います。常世（とこよ）式土器といって隣りの福島県会津の塩川町の遺跡で初めて確認され、その名がついています。

4）火焔形土器の世界

次は中期の土器です。みなさんご存知の有名な土器で火焔形土器と呼ばれているものです。この火焔形土器は昭和橋のたもととかにモニュメントになってありますが、あれは厳密には王冠形土器でしたでしょうか。白山陸上競技場、県民会館にもあって、そういうところの顔になっています。これは新潟を代表するというよりも、日本を代表する縄文土器だということで国内の縄文土器の展覧会でも貸し出されて行くとか、国外でも日本の美をテーマにするフランスとかアメリカの展示会などでも火焔形土器を持っていこう、それが喜ばれるということで、特に縄文土器を代表しているような扱いを受けるわけです。ところがこの土器は面白いことに、よく観察すると縄目の文様のない縄文土器ということで、非常に変わった土器なのです。古い草創期の土器は縄目文様のない縄文土器が多いわけですけれども、早期以降の縄文土器の中で縄目のない縄文土器というのは結構珍しいものです。そういう中の変り種の一つです。これが縄文土器を代表しているような大きい顔をして出ているということになるわけですけれども、この土器は実用か、非実用かという問題がよく論争されるのですが、これはよく観察するとやはり煤が外面についていたり、内面におこげがついていたりとか、そういう点で使われていることは間違いないだろうと思われます。ただし使われ方として日常の普通の使用というか、そういう煮沸などでこれが本当に使われたのかどうか、そういうことではなくて祭りの場で祭祀とか、そういうときにこういう土器が使われたのではないかという説もありますけれども、非常に使いにくい形態で、デザインが発達していて一寸ぶつかると壊してしまうような土器です。そういうようなことが問題になっているということです。

この土器は基本的には信濃川の中流域の土器で、最初見つかって、これが問題になったのは長岡の馬高という遺跡です。県立歴史博物館の近くに馬高遺跡というのがありますが、その遺跡の名前をとって馬高式土器という名前がついているのです。一方で火焔形土器というふうにも言われているわけです。皆さんもご存知だと思いますけれども、縄文土器の中で唯一の国宝というのが、十日町の笹山遺跡で見つかっている火焔形土器群ということになっています。国の重要文化財の指定になっている縄文土器は沢山あり、何十を越えていると思うのですが、ところが国宝になっているのはその笹山遺跡の火焔形土器群だけということです。数としては何十という数になると思うのですが、遺跡としてはその遺跡の一括しかないわけでして、それだけに貴重品であるということになります。この分布ですが、長岡の馬高遺跡、十日町の笹山遺跡に代表される遺跡があるということで、信濃川の中流域の土器であると言えます。そしてそこから伝播していくわけですけれど、その周辺でかなり遠くまで行った例としては、例えば海を越えて佐渡にも行っているわけです。佐渡では今三つくらい見つかっています。今回、2月7日から3月29日まで此処と佐渡博物館を会場に交換展示会をやりますが、その時のビラがあってその表紙を飾っている火焔形土器は佐渡の小木町長者ヶ平遺跡で見つかったものです。非常に美しい、造形的に優れた火焔形土器で、それが今回佐渡から来る予定です。こちらで作られたものが海を越えて

向こうに行っているのか、こちらの人が向こうで作ったものか、その辺が問題になるところですが、胎土分析といって粘土などを分析して調べれば、分かってくるかと思います。その他隣の群馬県とか栃木県、福島県、富山県という隣接県の所まで火焔形土器は伝播しています。ただし伝播して遠くなれば遠くなるほど徐々にデフォルメされて変形していくのです。信濃川中流域の本場の所からだんだんと顔つきが変わっていくという現象が見られるということです。この土器はそんなに広い広がりは持っていません。特産品というか優れた造形美を持っているので、当時の職人というか、かなり器用な人がこういうのを作っていたのだろうと考えられます。

図1　新潟大学・佐渡交換展示会ビラに載った長者ヶ平遺跡出土火焔形土器

この展示会のパンフレットの中にも火焔形土器があります。非常に美しいでしょう。この写真は小木の考古資料館に行って撮ったのですが、これは上にアクリルの蓋があって、それがねじ止めで外せなくて写真が非常に取りづらくて、アクリルの蓋をした状態で写真を撮っているのです。上のライトとフラッシュで反射しないようにと工夫し尚且つ文様が左右対称ではないのですが、うまくおさまるように意識的に撮った写真です。どうにか均整の取れた写真に仕上がりました。佐渡で出ている縄文土器の中では一番美しい土器だということで此処に使ったわけです。そういうことで海を越えての交易があったということになるかと思います。

5）縄文晩期の壺

これは晩期の土器で、ここからこっちは栄町の長畑（ながいばたけ）遺跡の資料です。一番右上は個人所蔵の寄託資料で、見附の武田さんという方が寄託されている非常に重要な美しい資料です。これは復元するとほぼ完形というか、ここまで整った晩期の壷型土器の資料は非常に珍しいという評価を受けている、学術的にも貴重な資料です。『縄文土器大成』という図録が講談社から刊行されているのですが、その中に出てきます。

これは大洞式土器と言われている晩期の新しい段階の土器です。大洞というのは岩手の、気仙沼の方にある遺跡でして、東北地方の遺跡の名前のついている土器型式です。それがこちらに来ているということは、東北からの人の移動があったのだろうと思うのです。これは見附の黒坂という遺跡で見つかっている土器ですが、東北地方の亀が岡文化という文化が南下してくる一端を示しているということになります。よく見るとこれは赤色の顔料が塗ってあるのです。元々は真っ赤に塗ってあったと思うのですが、今はそれが剥がれていますけれども、美的にも非常に優れています。それと注目していただきたいのはこれは壷なのですが、基本的には、縄文土器には壷がないと昔はいわれていたのです。壷とい

うのは弥生時代になると多く出てくるのです。壷は農耕を物語ると、稲作農耕で種籾などを貯蔵するために壷が出てきたのだと、朝鮮半島から稲作農耕などが伝わってくる時にそういう壷という形、器の種類が一緒に入ってきたということで、こういうものが出るということは、稲作農耕を物語るのだというようなことも言われていたのですが、そういう縄文土器の中に、晩期段階では確実にこういう壷が含まれている。だから必ずしも稲作を物語るものではないのじゃないかということが言われています。最近では更に遡って早期段階の南九州は鹿児島の上野原遺跡で壷が出てきているということも分かってきています。それは非常に特異な遺跡なのですが、そういう点も注目されています。

6）おしゃれな縄文人

次に石膏で作った人形がありますが、これは澤野恵美子さんという女子学生が作ってくれたのですけれども、耳たぶの耳飾は本物ではなくて模造品を作って入れています。当時、縄文人はおしゃれでこのように耳たぶに穴を開けてピアスのように耳飾をしていたわけです。この耳飾は大きいものから小さいものまであって、現在でもアフリカなどの先住民が耳たぶに穴を開けて大きな耳飾をつけているわけで、縄文人もそういうことをやっていたということです。それが何故分かるかというと、土偶に「みみずく土偶」とか言われるものがありますが、そういうものの耳たぶにこういう耳飾を表現したものがあってそういうことから分かります。小さいものから大きいものまであるのですが、多分子供の頃は小さいものを入れていて、徐々に大きいものを入れていったのではないかということもいわれています。特に成人の儀式とかそういった通過儀礼などで大きな耳飾につけ替えたなどということも言われたりしています。この間、國學院大学の卒論で耳飾をやった女子学生がいて、自分の耳にわざと穴を開けて実際に土製の耳飾を嵌めてみたそうです。結構大きいものが入いるのだそうです。

7）縄文時代の交易１－黒曜石－

次は縄文時代の交易というコーナーです。此処では黒曜石とアスファルトを取り上げています。これにもう一つ本当はご当地のヒスイを加えて三点セットで交易の問題を展示したいとは思っていたのですが、なかなか実物資料が集まらないのでヒスイまではやっていません。黒曜石ですが、此処にフェルトの布を使って日本列島を表現して、そこに黒曜石をいっぱい産地ごとに並べてあります。此処にある黒曜石は遺跡から出てきたものではなくて、現在取れたものを入手して展示してあります。正直言ってこの展示には苦労しました。例えばここに東京都の伊豆七島の神津島の黒曜石があります。これを欲しいと思って神津島の教育委員会に電話しました。どうにかして黒曜石が入手できないか、大学で博物館を作ったのだけれども展示したいのでお願いできないかと頼み込みましたら、陸地にはいいのがなくて海底に良質のものがあるので、これから海に採りに行ってやろうということになって、採ってきて送ってくれました。向こうでただで送ってくれたので、非常に恐

縮して、申し訳ないのでこちらは新潟のお酒を送ってやったのですが、そういう形で現代の交易、物々交換を実施したという経緯があります。赤いフェルトの上に黄色のポイントがありますけれども、これは新潟の隣の巻町にある大沢遺跡の位置です。この下に石器が並んでいますけれどもいろんな色の鏃があります。これは石材が皆違うのです。奥のほうに黒曜石が並んでいます。手前に硅質頁岩を使った鏃もあります。さらに手前にはチャート、これも堆積岩の一種ですけれども、硅酸質の化石になったものです。それから玉髄、メノウを使ったものもあります。他に水晶がありますが、産地は山梨県が有名で、印鑑などを作っています。そういうようなところから来ている可能性もあるわけです。このような石材で巻周辺で入手できないものがここ大沢遺跡に集まってきているわけです。

黒曜石と一口に言っても、よく観察すると一番左側は透明度の高い黒曜石です。「白曜石」と言いたい位の黒曜石であって、右から二番目のように非常に真っ黒い黒曜石があったり、縞状に筋が入っているとか、不純物の入り方とか、透明度の違いでここにあるように肉眼的にも顔つきが違うのです。透明度、色調、同じ黒でも漆黒の黒とか、一寸赤みがかった黒とかいろいろあるのです。そういうことで全国的に違いがあるのです。それでこの大沢遺跡のものは肉眼的、経験的にある程度産地が分かるのですが、それ以外に、より科学的に産地を突き止める方法があるのです。物理化学的方法で蛍光X線分析という方法があります。それで分析するとこの黒曜石の中に鉄分とか、アルミニウムとか、ストロンチウムとか、ルビジウムとか、カリウムとか、カルシウムとかそれぞれ元素レベルでどの程度の比率で入っているのかが分かります。それを比べてみると、よりどれに近いかということからその産地が割り出されます。そういうのを産地同定と呼んでいます。そうやって研究したところ、大沢遺跡の黒曜石が北は北海道の白滝の方から、南は九州の長崎の淀姫という所、あるいは日本海側だけでなくて太平洋を越えて神津島の方からも来ているということになります。

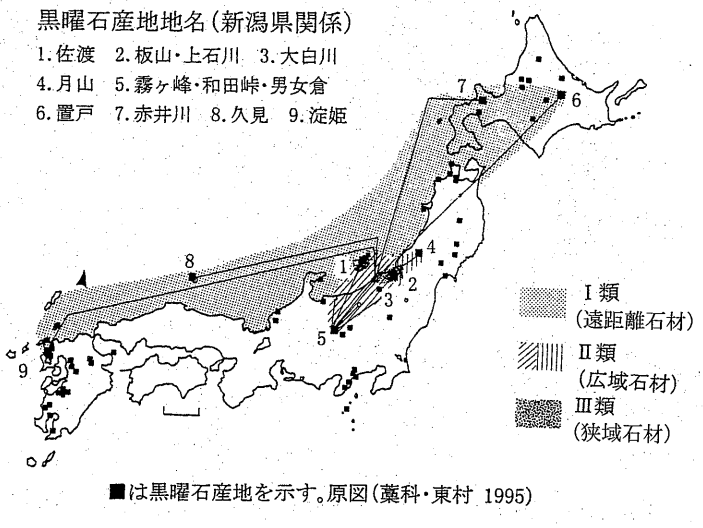


図２　縄文時代における新潟県の黒曜石流入状況（土橋　1999より）

新潟にも黒曜石の産地は勿論あるのですが、身近の所では白っぽい砂層の中に入っている小さい黒いものがあります。これは新津の金津丘陵の石油の里の辺りで採集できる黒曜石です。こんなに小さな黒曜石なので大きな石器は作れないのですが、小さな鏃程度なら作れるというものです。その他新発田の板山だとか佐渡でも金井とか佐和田の方で黒曜石が採れます。新潟の黒曜石はあまり質が良くないのですが、それを補うようなことでそういう全国各地から良質の黒曜石が搬入されるということになるわけです。展示してある黒曜石は現代のもので、これを集めた苦労話はこれだけで何時間にもなります。例えばこの辺の霧が峰とかは長野のもので、これを採掘している業者から譲ってもらったものです。これは発泡スチロールか、断熱材の原料になるのですが、それを現在採掘している会社があります。黒曜パーライトという、パルコンの原料になる、耐火性の建材になるものらしいのです。他にも島根県に隠岐という島がありますが、後醍醐天皇が流された島です。ここにも黒曜石の産地があって、日本唯一の黒曜石店という黒曜石を専門に商う業者がいまして、それをインターネットで調べて注文したのです。

ここに佐渡の小木町長者が平遺跡で私たちが拾ってきた石器があります。その中に非常に透明度の高い黒曜石と真っ黒い不透明の黒曜石が含まれていました。真っ黒の黒曜石は恐らく佐渡産のもので、透明度の高いものは恐らく長野県の霧が峰産の黒曜石だと思われました。実際に今回螢光X線分析をしたのですけれども、それが裏づけられました。さらに、そういう黒曜石が原石で入って来ているのか、それとも製品で入っているのかという研究もする必要があるわけです。こんな塊の重いものを遠隔地まで持っていくのか、という質問をされる方もいるのですが、それをやはり見極める必要性があるのです。どうやったら分かるかということなのですが、そこで面白いのはその遺跡から出てくる製品となっている黒曜石だけではなくて、その石器を作るときにできた剥片とか砕片、英語で言うとflake（フレーク）とかchip（チップ）と呼んでいるものなのですが、そういうものが落ちているわけです。それも拾ってくると。一般のコレクターの方々は、形になっている鏃とかそういうものしか拾ってこない。だけれども私たちはそうではなくて、そういう屑というか、カスも拾ってくるのです。そのカスを分析することによって、どこで石器が作られたかが判ります。ここに佐渡の石器を作ったときのカスがあります。これを見ると殆ど地元佐渡産の真っ黒い黒曜石のかけらです。透明度の高い黒曜石の剥片が無いということは、可能性として霧が峰産の黒曜石の鏃というのは、もしかしたら原石が持ち込まれて佐渡で作られたものではなくて、島外で作られたものが、製品として佐渡に渡っているということもうかがわれます。

8）縄文時代の交易２－アスファルト－

次はアスファルトです。アスファルトは現在、道路舗装に使われています。このアスファルトを何時から人類が利用していたのか、日本人は何時からそれを利用していたのかということですが、遺跡を調査しますとアスファルトを使った遺物が出てまいります。

それはこういう鏃にアスファルトが付着していると、特に鏃の根元の所に、ここは矢柄に装着される部分になるわけですが、矢柄にくくりつけてそこを補強するためにアスファルトを少し暖めて粘性を持たせたところで、それを塗って乾くと固まるわけです。アスファルト舗装もあれを暖めて軟らかくして使うわけですが、冷めると固まるわけです。そういう形で舗装していくわけですけれども、同じ原理です。このアスファルトがどういうところに産出するかというと、石油が採れる所に出ると言われています。北海道の南端から、この新潟辺りの日本海側に油田が分布しています。新潟県内では主に五ケ所の油田地帯が知られていて、頸城油田、西山油田、東山油田、新津油田、もう一つ黒川油田があります。そういう所の産地からアスファルトが来ているということです。今回の交換展示会で、佐渡からアスファルトを塗った鏃が来ることになっているのですが、佐渡からアスファルトは産出しないので、それは何処かから行っているわけです。そこで、何処から行っているかということを調べるという研究をこれからしようとしているのですが、どうも油田ごとに顔つきが違うらしいのです。それを元素レベルでの分析に出す予定です。それで何処の油田から行っているのか、そういうことが分かれば面白いなということで、それも乞うご

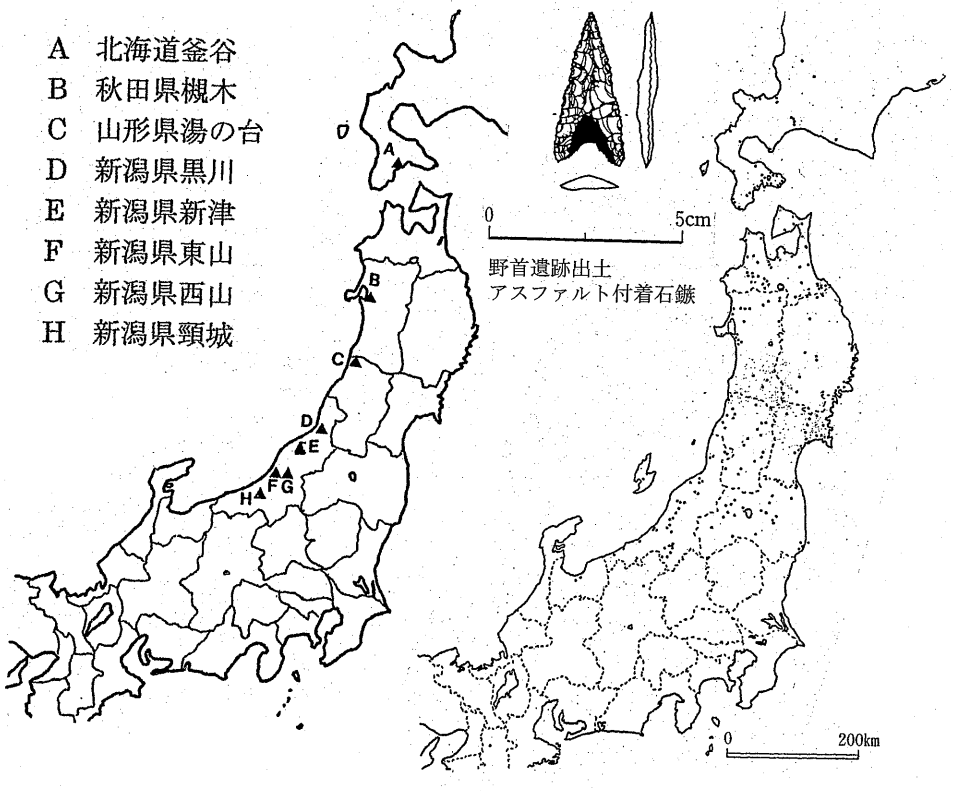


図３　油田の分布（左図）とアスファルト付着遺物の分布（右図）

期待ということです。

9）トキより先にイノシシが滅んだ

貝塚から出てくるものには、自然遺物の貝殻があるのですけれども、それ以外に当時食べた動物の骨、獣や鳥の骨が見られます。佐渡の貝塚から出てきた動物の骨にどんなものがあるかということを調べてみると、イノシシが多くて、それに比べてシカは少ない。どういうわけかシカの角はあるのですが、他の部位の骨が非常に僅かです。イノシシが凄く幅を利かせているのです。ところで皆さんは現在佐渡にシカとかイノシシが棲んでいると思いますか。さっき佐渡出身の学生に聞いたのですが、朱鷺は見たことはあるが、シカやイノシシは見たことはないということなのです。事実、現在佐渡にはシカやイノシシは棲んでいないのです。だけど縄文時代の佐渡の貝塚を掘るとシカやイノシシが出てくるというのはどういうことなのでしょうか。絶滅してしまったのでしょうか。一つの考え方としてこちらの越後側にシカやイノシシがいて、それを解体して骨付きのものを向こうに持って行って、佐渡と交易をしたとかというのも考え方としてあり得るし、十分成り立つと思うのです。シカ、イノシシを舟に乗せて向こうに連れて行ったということもあり得るのです。生きているものか、死んだものかどうか分かりませんけれども、その他イノシシが海を泳いでいったということもあり得るのです。実際、イノシシは泳いで海を渡るそうです。九州などではイノシシが島へ泳いで渡ったという記録があるそうです。他に当時は佐渡と越後が陸続きだったという考え方もあるのですが、分析しますと、結構深くて縄文の海退、海水面が下がって陸地が広がった場合に果たして越後と佐渡がくっ付くかという問題があるのですが、残念ながらくっ付かない。一番深いところは60～100メートルくらいあって、計算によるとつながらなかったということです。海水面が10メートルくらい下がった時期もあった可能性があるのですけれども、それでは繋がりません。10km位の所を２回渡らなくてはならないのです。それで陸続き説は駄目です。

話を戻しますと、何故佐渡にシカやイノシシがいなくなったのかということですが、乱獲説というのが有力です。まず、シカが非常に少ないのです。シカはここでは角しかないのですが、その角は根元を切って加工した形跡があるのです。シカの角というのは当時道具として有効な素材だったのです。シカの角は加工がある程度しやすい。それでいてかなり弾力性があって丈夫であると。これは当時骨角器として、釣り針、銛やヤスを作る時の素材として、一番優れていたのです。もしかしたら、越後側で獲れたシカの角を切って骨角器の素材として佐渡に移入した可能性もあるということで、佐渡にシカはいなかったのではないかという説もあるのですが、シカの骨が実際に出ているのである程度はいたのではないかと思います。しかしイノシシよりも先にシカが絶滅した可能性もあるのです。

次にイノシシの方です。面白いことに佐渡で見つかっている猪は、「老若男女」ではないのですが、子供もいれば、大人もいるしオスもいればメスもいる。それも雑多に片っ端から食べているということなのです。ところが太平洋側の貝塚を調査するとそっちの遺跡で

はオスの成獣を中心に食べていて、幼獣とかメスはあまり食べないのです。少ないのです。ということは当時環境保護というか、資源保護のためにわざと調節して食べていたということがあったと思われるのです。ところが佐渡の状況を見ると片っ端から食べている、それでは早晩、遅かれ早かれ食べ尽くしてしまう、絶滅してしまうというような状況があったのだろうと思われます。朱鷺よりも先に佐渡ではシカやイノシシが絶滅したのだということで、考古学というものが現代社会に何をもたらすかということがあるのですが、そういう点も教訓として教えてくれるのではないかと思います。朱鷺の保護ということもありましたが、それよりも先に佐渡ではシカやイノシシを食べ尽くしてしまったということを知り、資源は大切にしなければいけないということを、こういうところから学んでもいいのではないかと思います。

10）弥生佐渡の赤玉石

時間になりましたので面白い所だけでもやりたいと思いますが、ここから弥生時代の話しに移って、佐渡の弥生時代を考えてみたいと思います。佐渡の弥生時代を地元の方々に誇りに思っていただきたいのですが、佐渡の弥生時代を代表するものとして赤玉というのがあります。縄文時代にも地元の石材の赤玉を利用して鏃を作っていました。その他石の錐とかに使っていたのです。弥生時代の佐渡の鏃は、戦い用の鏃も作っていた可能性もあるのですが、狩猟用の鏃も勿論作っていたわけです。その素材に縄文時代から引き続いて、地元に産出する赤玉石を結構使っていますが、それ以外に赤玉石の用途があったのです。佐渡の弥生時代中頃の時期に赤玉石を利用して首飾りを作っていたのです。それは非常に優れものの特産品でありまして、直径が２～３ミリ、長さが２～３センチで、径が１ミリくらいの穴を開けて竹の管みたいに通している、そのような管玉を作っているのです。これを今作れといわれても非常に大変であります。よっぽどの熟練者なら作れるかと思うのですが、どうやって作ったのかと不思議に思うくらいの技術です。それが北は北海道、南は山陰、日本海側にも太平洋側にもずうっと全国にそれが分布、流通していて佐渡の特産品であったということが分かってきています。

11）倭国大乱と越後の弥生高地性集落

次に、ここに佐渡の古墳時代の人骨があります。これは腕の上の方の上腕骨ですが、これには刀傷があります。恐らくその傷では死んでいると思います。ですから佐渡で古墳時代に戦いがあったのだと思いますけれども、そういう戦いが日本列島で縄文時代から行われたか否かという問題があるということは先にお話しました。最近四国高知の居徳遺跡というところで殺傷人骨が沢山見つかってきて、縄文時代にも戦争があった可能性が指摘されています。弥生時代には倭国「大乱」と書いてありますが、「日本」の国名は七世紀以降でして、それ以前の弥生時代、古墳時代には「倭国」と呼ばれていまして中国側の文献に「倭国乱」とか「倭国大乱」という記事が出てきますが、皆さんご存知の卑弥呼さんのこと

1. 北海道・大川123号土坑墓（4）
2. 北海道・大川620号土坑墓（3）
3. 岩手・常磐広町土坑墓（11）
4. 宮城・下ノ内浦15号竪穴（2）
5. 群馬・有馬７号墓SK389（2）
6. 〃　2B号墓SK45（1）
7. 〃　2B号墓SK54（1）
8. 〃　６号墓SK440（1）
9. 〃　11号墓SK435（1）
10. 〃　12号墓SK425（1）
11. 〃　24号墓SK451（1）
12. 千葉・石場３号方形周溝墓（1）
13. 千葉・田向南10号住居（1）
14. 〃・六孫王原50号木棺墓（5）
15. 〃・御林跡34号主体（1）
16. 〃・小田部新地28号土杭墓（2）
17. 〃・向神納里30号方形周溝墓（1）
18. 〃・庚申塚１号方形周溝墓（8）
19. 〃・常代１号円形周溝墓（3）
20. 〃・常代15号円方周溝墓（1）
21. 千葉・大井戸八木１号土坑墓（8）
22. 〃・〃　１号方形周溝墓（3）
23. 東京・丸山東４号方形周溝墓（3）
24. 〃・田園調布南１号方形周溝墓（4）
25. 神奈川・峰１号方形周溝墓（1）
26. 長野・根塚（31）
27. 〃・牛出古窯５号住居跡内埋葬（5）
28. 〃・栗林（8）
29. 〃・光林寺裏山（71）
30. 長野・本村東沖３号木棺墓（15）
31. 〃・松節77号住居内合口壺棺（1）
32. 〃・篠ノ井203号土器棺墓（1）
33. 〃・社宮司（17）
34. 〃・桟敷（25）
35. 〃・天王垣外（132）
36. 静岡・愛野向山Ⅱ・Ｂ区２号円形周溝墓（3）
37. 〃・〃・Ｃ区11号木棺墓（2）
38. 〃・北山１号方形周溝墓（3）
39. 〃・芝本Ｈ・１号方形周溝墓（3）
40. 石川・山王丸山32号土坑（103）
41. 〃・〃　31号土坑（10）
42. 〃・〃　６号土坑（1）
43. 〃・細口源太山８号方形周溝墓（2）
44. 福井・西山３号方形周溝墓（1）
45. 鳥取・宮内５号土坑墓（1）

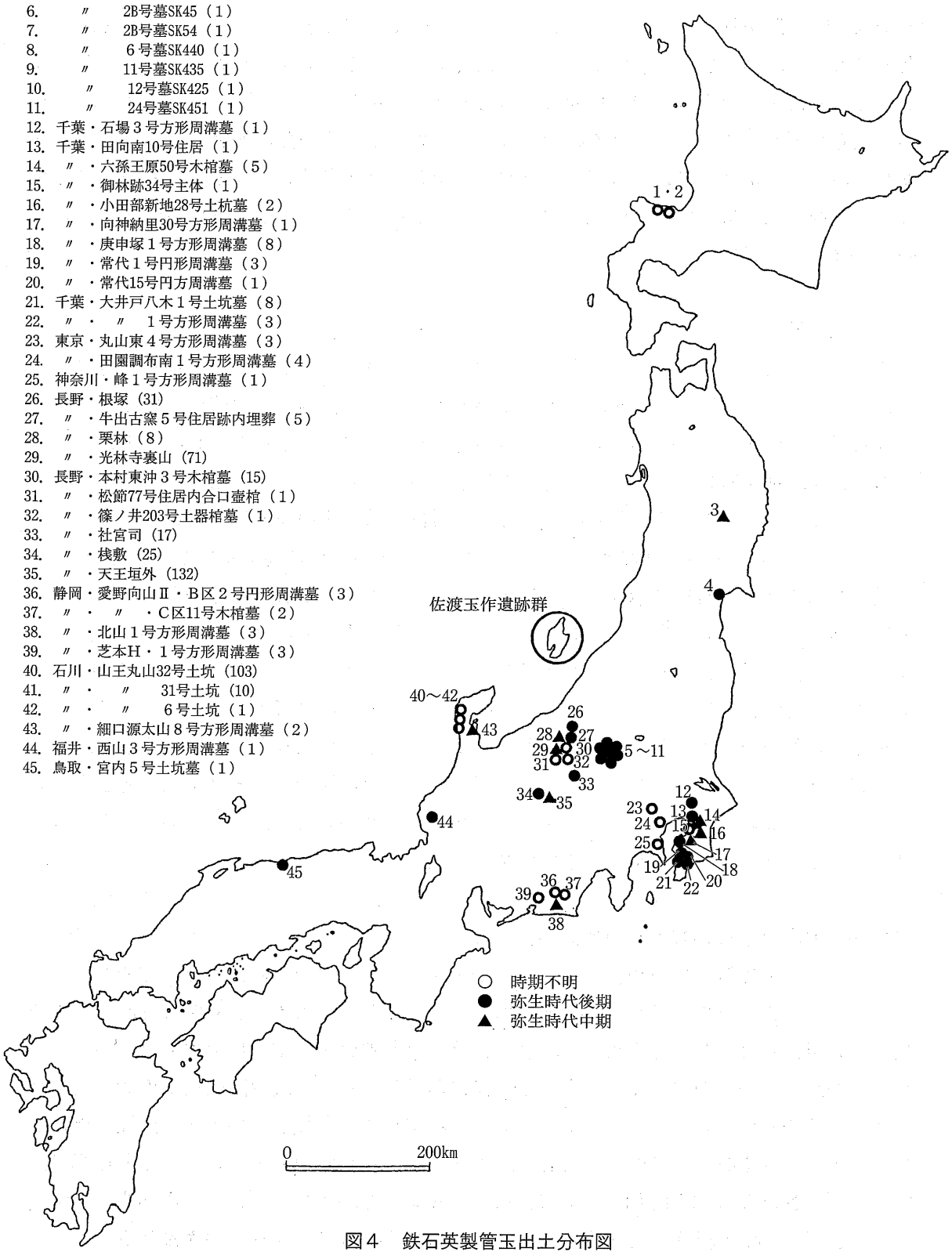
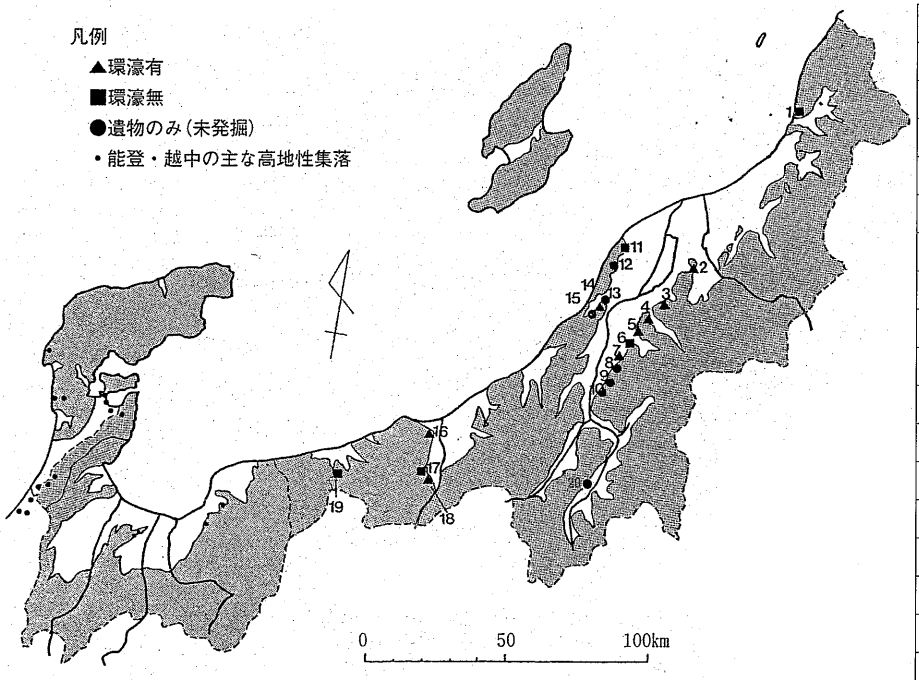


図４　鉄石英製管玉出土分布図

が書いてあるいわゆる「魏志倭人伝」の中には「倭国乱」とあります。日本はその当時内紛状態だったのではないかということで、それを物語る考古資料に何があるかということですが、そういう戦争を物語るものとして３つほど考古資料があげられます。１つ目は武器が出てくる。２つ目は殺傷人骨が出てくる。３つ目は防御性のある集落が出現するということです。こういうものが弥生時代に出てくるわけです。この新潟付近にそういう防御的な集落が認められます。

ここの展示は上越の裏山遺跡です。上越教育大学の裏手の山にあるのですが、この地図にありますように、長野の方から北上してきた上信越自動車道が東西方向の北陸自動車道にＴ字型に合流する直江津ジャンクションの手前約１キロの所に裏山遺跡がありました。現在壊されて無くなったので過去形ですが、そういう遺跡が道路建設の前の調査でこういう山の上から見つかりました。山の上までの比高が70メートル、海抜で92メートルくらいの所です。そのような高い所から何故弥生時代の集落が見つかったのでしょう。竪穴住居が８つほど出てまいりました。当時の弥生時代というと教科書には登呂遺跡が出てまいりますが、最近は登呂遺跡は影を潜めてしまって吉野ヶ里遺跡に取って代わって、さっき学生に聞いたら登呂遺跡といってもあまりぴんと来ないようです。登呂遺跡は低い所にあって、竪穴住居や集落の営まれたすぐ近くに田んぼがあります。そういう生産基盤の水田があって、すぐその脇に集落が営まれているという位置関係になっているわけです。ところがこの裏山遺跡の場合はどういうわけか高い所にある。弥生時代が総て稲作農耕かという問題があるわけで、弥生時代の畑作という問題もあるので、そういう水田稲作ばっかりではなく畑作農耕を基盤としたそういった高い所にある集落を考えてもいいのではないかという説もあるのです。その一方で、そういう不便な所に作るのは、戦いに備えた砦、中世の山城のような防御的な集落であるという説が有力なのです。それを高地性集落と呼んでいますが、この場合は更に加えて、写真の甘粕先生が立っていらっしゃる所に凹みがありますが、これは人工的に加工したものです。これはそこに濠を掘って、下から敵が攻めてきたときに壁状になっていて登れないという状況になるわけでして、私たちも見学に行くときに大変だったのです。高い所にあり尚且つ濠を巡らせている。だから高地性環濠集落と呼びます。二重三重に防御を固めている防御性の高い集落です。この遺跡の平場の所からは大量の礫が20キロくらい出てきています。それは、敵が攻めてきた時にぶつける石つぶてとして使った武器だという説もあります。それとこの遺跡からはドーナツのような形をした、環状石斧というのですが、真ん中に棒を差し込んで棍棒の頭に使ったものが見つかっています。この環状石斧というのはこの地球上で実際に使っている種族、先住民がいて、パプアニューギニアなどではそれを武器として使っています。その本物は塩沢の今泉博物館に行くと展示してあります。裏山遺跡から出てきたのは、それとそっくりだということで、武器だった可能性があります。

それで今日の資料を見ていただきたいのですが、これは県内の高地性集落の分布を落とした地図です。ここに頸城平野、高田平野とも言いますが、ここの16番が裏山遺跡です。先



1	村上市滝ノ前遺跡
2	新津市八幡山遺跡
3	三条市二ッ山遺跡
4	三条市経塚山遺跡
5	見附市大平城遺跡
6	見附市岩沢遺跡
7	長岡市横山遺跡
8	長岡市原山遺跡
9	長岡市賢正寺遺跡
10	長岡市阿部山遺跡
11	巻町大沢遺跡
12	巻町山谷遺跡
13	和島村横滝山遺跡
14	和島村赤坂遺跡
15	和島村太平遺跡
16	上越市裏山遺跡
17	上越市下馬場遺跡
18	新井市斐太遺跡
19	糸魚川市後生山遺跡
20	六日町飯綱山遺跡

図５　能登、越中、越後の主な高地性集落（飯野　1999改図）

述しましたように、現在は上信越自動車道が北上してきて、北陸自動車道が東西に走っている。そこのジャンクションは交通の要所に当るわけです。その近くには直江津港があって、重要な位置を占めているわけです。それは現在だけのことではありません。中世の戦国期においても、裏山遺跡の隣の山には、上杉謙信の居城の春日山城が作られます。そういう所は時代を超えて、戦略上非常に重要な位置を占めているということです。弥生時代も長野の方面から来る人と北陸南西部、北陸北東部からの人とか物資の行き来する結節点で、戦略上非常に重要な場所であったと思われます。そういう所を敵が攻めてくると考えられます。そこで、ここに立って、海の様子とか、平野の様子を眺めるというような非常に重要な意味を持っていたということが考えられるわけです。そういう点にも注目していただきたいと思います。

それと新潟平野とか蒲原平野とかいわれているこちらにも高地性集落が沢山作られています。そういうことから戦闘状態がこちらの方にも波及してきたということが考えられます。その高地性集落が等間隔に繋がっていることも面白いことです。何故そうなるのかということなのですが、高地性集落には発掘すると火を焚いた場所が出てきます。現在私たちの通信手段としては携帯電話が普及しているので便利になっていますが、当時の通信手段としては、例えば敵が攻めてきたということを隣の集落に伝えるためには、戦国期もそうですが、恐らく狼煙を上げるということがやられていたわけです。「のろし」というのは

漢字で書くと狼の煙と書くのですが、それは狼の糞を燃やすと白い煙が立って見易いということでこう書くのだそうですけれども、それで高地性集落を調査すると狼煙の跡が出てきたりします。そういうこともこういう集落間の等間隔の連鎖などにも関わっている可能性があると思われます。

12）外来系土器の流入

何故そういう戦いが起きたかという、何処と、何処の集団の抗争があったのかということを考えていく上で一つ鍵を握ってくるのが、遺跡から出てくる土器です。その土器の顔つきを見るということが重要です。そこで面白いのがここにある土器です。巻の大沢遺跡の弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての土器です。ここでは、顔つきの違う土器が同じ遺跡から見つかっています。左上にある土器は波状やすだれ状の紋様をつけた土

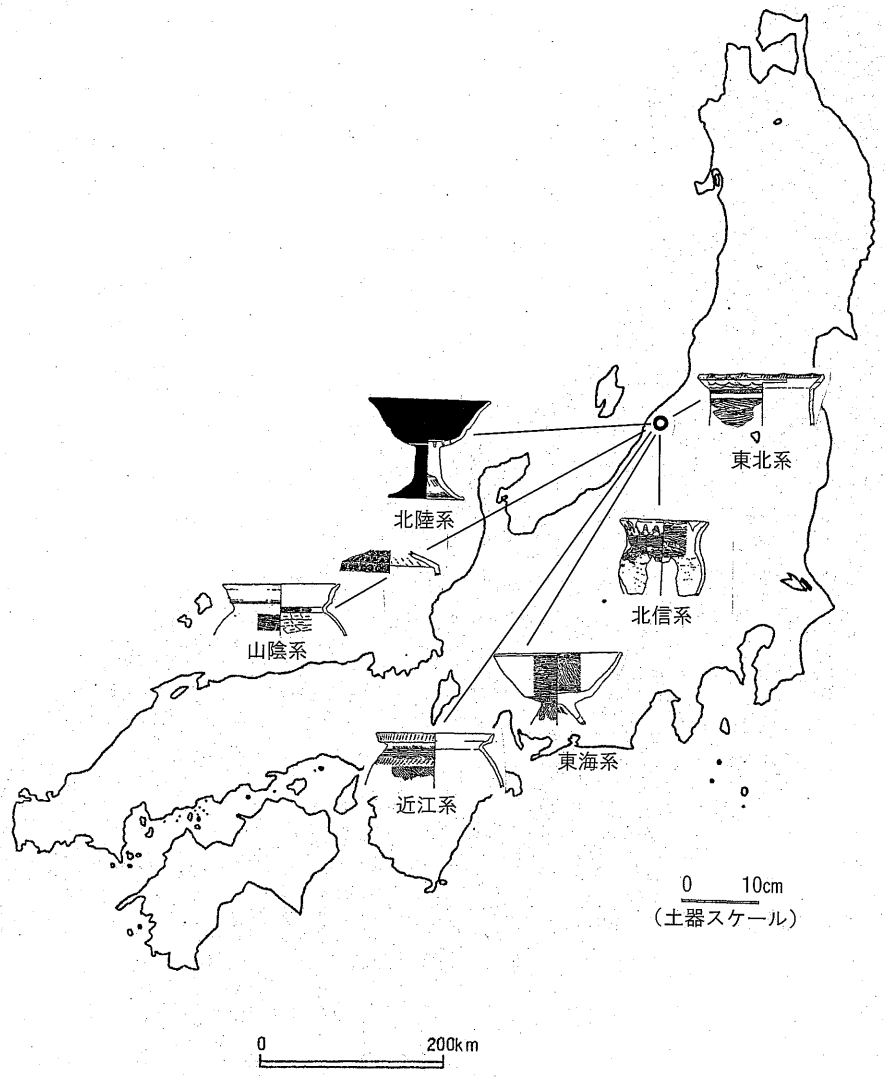


図６　巻町大沢遺跡出土外来系土器とその故地

器で、これは北信濃、長野北部の土器です。右側にあるのは高坏で、足の付いたお皿が付いていますが、この土器のグループは、伊勢湾の現在の愛知県の名古屋の方の土器です。更に左側の上から二番目の土器ですが、これは受口状口縁の土器と呼んでいるのですが、滋賀県の琵琶湖周辺の近江系の土器です。そういうものが入ってきています。多少近畿地方系の器台、壷を載せる器ですが、そのように遠隔地の系統の土器がここで沢山出てきているということです。尚且つここでは東北南部系の土器も見つかっています。図の中に入っていませんが、出雲系の土器、山陰系の土器も入っています。そのように日本各地の遠隔地の土器がここに来ているそういう現象は何故起きるのかということですが、東北系の土器を考えていく上で、一寸東北系の土器の話に関連してなのですが、実はここに弥生時代の石の鏃があります。

13）アメリカ式石鏃の物語るもの

弥生時代も鉄や青銅の鏃だけではなくて、この辺では石の鏃が使われていました。狩猟に使われたし、戦いにも使われた可能性がありますけれども、これは非常に変わった鏃でして、アメリカ式石鏃と呼ばれる変わった形の鏃です。スペードの形をしたような鏃なのですが、この根元の部分に抉りを入れて、この復元した模型のように矢柄を装着しやすいようになっています。この形の鏃に何故アメリカ式という名前がついているかというと、実はアメリカ大陸、北アメリカの方で先史時代の先住民が使っていた鏃の形によく似ているのです。ただし日本の弥生時代の時期とは時間がずれています。ですから直接は関係がなく、他人の空似、似て非なるものと考えられます。だけれども、よく似ているので「アメリカ式石鏃」という学術用語が使われています。この鏃はどのように分布しているかというと、東北地方の南部を中心に分布していて、この地域の集団が主にこの鏃を作っていたと考えられます。一方、この地域の集団がどういう土器を作っていたのかというと縄目文様のある弥生式土器を作っていたのです。縄目の文様のある縄文式土器ではなくて、縄目の文様のある弥生式土器を作っていた集団です。これは天王山式土器という名前がついていて、福島県の白河に天王山という遺跡があってそこで初めて見つかったので天王山式という土器の名前がついていますが、その集団がこういう特徴的な鏃を作っているのです。その集団が新潟県地域の方にも南下してやってきて、その分布の南限に当っているのです。ですからそういう東北南部の人たちも来ている。そのほかに土器から見ると、山陰の人たちも来ているし、近畿地方の人たちも来ているし、東海地方の人たちも来ているし、滋賀県の方の人も来ているし、北長野の方の人も来ているということで、あちらこちらから人が来ていることが判ります。何故ここに来ているのかということですが、一つ考えられるのは、西の方から来ている連中は倭国大乱の連中で流民といいますか、戦乱を免れて、難民としてこちらにやってきている可能性があります。東北地方の人たちも来てこういうところで接する。そういういろいろな人たちがここでぶつかりあって、それで政治的な緊張関係が起きて、先の防御的集落が作られたという可能性が一つ考えられるのではないかと

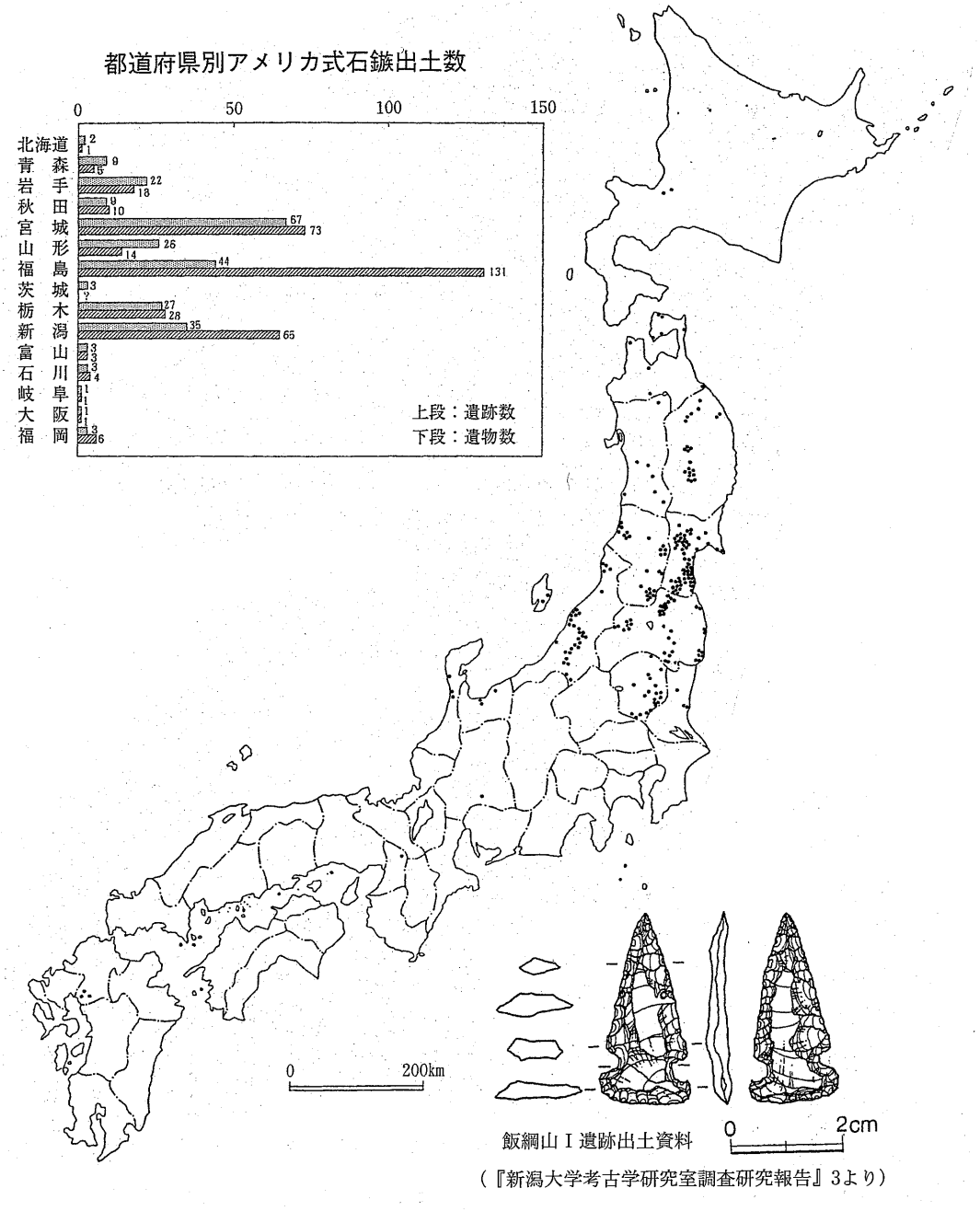


図７　アメリカ式石鏃出土分布図（安達　1999改図）

思われます。

14）北方文化との出会い

最後であります。準備した資料がまだありますけれども、ここに、変わった土器がありますが、これが続縄文土器の後北式土器という特徴的な土器であります。続縄文というのは、続く縄文と書きますが、縄文土器ではないのです。何時のものかというと九州、四国、

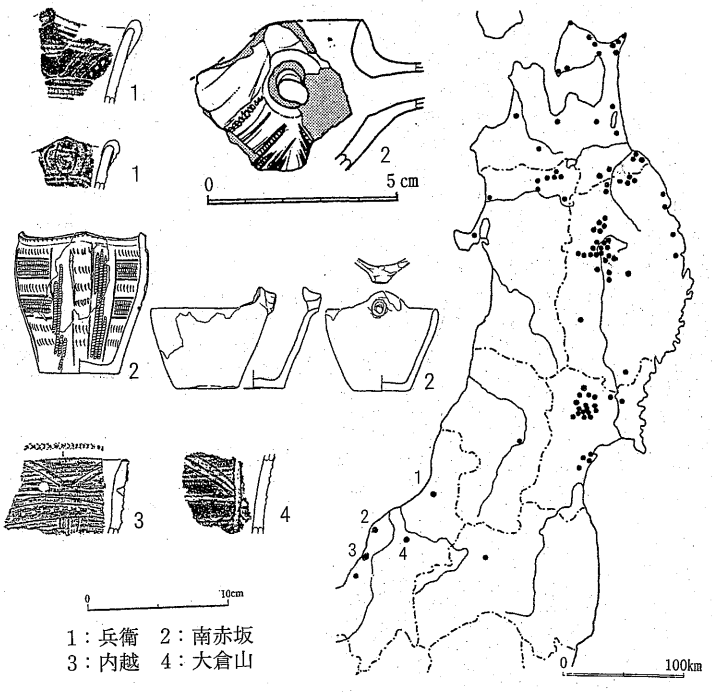


図８　東北地方における後北式土器の分布と新潟県出土後北式土器

本州等で弥生文化が栄えていた弥生時代ないしは古墳時代に相当する時期の土器です。それが隣の巻町の南赤坂という遺跡で見つかっています。これは何処の系統の土器かというと、北方の北海道系統の土器です。それがこちらの方に南下してやってくるという形になります。この続縄文という文化は稲作農耕を受け入れていません。北海道には稲作農耕の弥生の文化は入って行かないのです。ただし金属器だけは伝わったのです。金属器はあって、従来の縄文的伝統の狩猟、漁労をやっているという文化を続縄文文化と呼んでいます。その集団が何故こちらにやって来ているのかということです。一つは寒冷化、もう一つ考えられるのはこの辺で栽培されていた米とその集団が特産品としている毛皮などを交換するという交易でやってきている可能性があります。

とりあえずここらへんで時間が来ていますので今日のところは終わりにしたいと思います。まだ古墳時代の話も出来なかったし、下に飯綱山の出土品なども準備してあったのですけれども、その辺のお話が出来なかったという心残りがありますが、研究がどんどんと進み飯綱山は毎年書き換えるような状況になってきていますので、そういう発表も追い追い出来るかと思います。

（終わり）